

JAICOH NEWS LETTER

NO : 51 2006年11月発行



歯科保健医療国際協力協議会

Japan Association of International Cooperation for Oral Health

事務局：〒344-0003 埼玉県三郷市彦成 3-86 Tel & Fax : 048-957-2286

発行：深井稜博 編集：榑崎正子、梁瀬智子

『今年こそは早いうちに年賀状作るぞ〜』と毎年、今の時期になると思います。今年も残すところ、2ヶ月・・・今号はまだ暑い盛りに熱く開催された“第17回歯科保健医療国際協力協議会学術大会”の特集です。トップは今大会の大会長、昭和大学歯周病学講座助教授の鈴木先生です！

第17回歯科保健医療国際協力協議会総会および学術大会を終えて

昭和大学歯学部歯周学講座・JAICOH副会長

鈴木基之

梅雨明け前の快晴の7月2日、JAICOH第17回総会および学術大会が例年のように昭和大学歯科病院臨床講堂にて一般演題12題とシンポジウム1題の構成で開催されました。

シンポジウムは「国際協力に関する歯学部教育の課題」と題し、大会長より「歯学教育の現状と国際保健」の口演が企画趣旨説明をかねて行われ、最近の歯学教育がコアカリキュラムによる全国の教育の均質化とその評価方法の客観化についての概説と現在の歯学教育の中で国際保健についての時間数が少ないなどの点について説明があった。その後国際協力にかかわる学生の報告として、日本大学松戸歯学部木村匠君「松戸歯学部国際保健部の活動について」北海道大学中澤誠多郎君「歯科学生との相互理解を深めるための交流目的としたバングラデシュスタディツアーの報告」東京歯科大学白井亮君「ラオス・タイスタディツアー2006報告」の3題の学生が行った活動報告があり、学生の意欲の高さと活動の活発さが伺えた。

また中村修一先生の「国際歯科保健の講義を通して、歯科学生はどのように反応するか」という演題では2校の歯学部学生に対し行った講義後の学生の意識変容について報告され、ともすれば無気力な学生が多くなったような昨今、国際保健活動が夢や目的を与え、未来の歯科医師に対し歯科医を目指すよいモチベーションとなっていることがわかった。

JAICOHではシーズプロジェクトを通じ未来を担う学生への援助を行っているが、今後も継続する一方で、歯学教育の中で国際保健についての教育の充

実させることを今後の活動課題のひとつであるという認識を再確認した。

一般口演では聖路加国際病院、KDC-SASがそれぞれパキスタン、タイで行った、災害時の緊急支援についての報告があり歯科領域の国際協力では途上国での地域保健など平時の協力活動が主体であったがこれらの演題は災害発生後早期に災害地で協力活動を行ったものであり、阪神大震災時にも歯科的需要が多く発生し、歯科の支援が必要であったことから、今後のJAICOH会員の活動の方向性を示唆するものであり興味深かった。

また、カンボジア、モンゴル、トンガなどにおける活動のより一層の充実が報告され、また海外で仕事を行う上で大きな問題である給与などの待遇と能力についてについて田中先生の中国体験記「現地医療スタッフとの給与格差における考察—人材育成における問題点—」は海外で活躍する日本人の能力について問題提起するものであった。

総会では聖路加国際病院村田千年、KDC-SAS平田宗善先生の両名が理事に推薦され、また本会においても緊急支援活動について検討され、今後の会運営について、協議された。

第17回大会は北は北海道、南は九州より会員が参集され、特に北大学生も遠路はるばる多数参加していただき、予想を超える参加者数で準備したプログラムがなくなり一部参加者の方にご不便をおかけしましたことをお詫び申し上げます。また本会開催にあたり日本歯科医師会より開催援助をいただきましたことを報告させていただきますとともに日本歯

科医師会に対し感謝いたします。
学会終了後別室にて懇親会が開催され、少ない時

間の中会員相互の気の置けない議論と親睦を深め、
また会員諸氏の熱意を加えた暑い1日が終わった。

鈴木先生プロフィール

東京都出身。1979年神奈川県歯科大学卒業。現在、昭和大学歯周病学講座助教授。1992年 JAICOH カンボジア・クロッパハウプロジェクト、1995年 JAICOH カンボジア教員養成プロジェクト参加。1992年より歯周炎自然史調査中国河北省承德市。2000年・2005年歯科疾患予防活動中国長春市。

国際災害支援における歯科医療の役割 - パキスタン北部地震・医療チームに参加して -

村田千年*、玉木真一**

* 聖路加国際病院 歯科口腔外科 ** 聖路加国際病院 医事課

【目的】

2005年10月に発生したパキスタン北部地震災害に対して、聖路加国際病院は2005年11月～2006年3月にかけて医師(救急部、小児科、内科)・歯科医師(口腔外科)・看護師・助産師・調整員からなる災害医療チームを5回にわたり派遣した。歯科医師は後期チームにおいて参加し現地での歯科診療・口腔保健衛生活動を行った。国際災害医療現場における歯科医師の役割について考察を加え報告する

【対象】

パキスタン北西辺境州バラコットおよび周辺山岳地域における被災者。

【結果・考察】

歯科医師を含む医療チームは2006年3月にパキスタン陸軍の設置した避難キャンプ内の医療テント(BHU: Basic Health Unit)において内科医師・看護師・調整員・現地スタッフらと活動を行った。またキャンプ周辺の山岳地帯の村へ巡回診療も施行した。医療テントには70～80人/日の患者が来訪した。



避難キャンプ周辺地域での巡回診療

災害発生より期間が経過していた為外傷の患者は少

な

く、発熱や下痢、長期間のキャンプ生活による身体の不調を訴える者などが多かった。来院患者の約2割が口腔症状を主訴としており、口腔症状には重度歯周病や口内炎が多くみられた。総じて口腔衛生状態は不良であり、残根状のウ歯を多数放置した状態の患者が多く、不明熱など全身疾患の要因となり得ると考えられた。これらの患者に対して抜歯などの処置の他、現地スタッフの協力を得てブラッシング指導・口腔衛生指導を施行した。その他、キャンプを管理する軍人や現地スタッフの受診希望が多数あった。



避難キャンプ地内でのブラッシング指導

災害医療において、災害発生から0～48時間のphase0～1においては救出医療・外科的応急処置が必要とされるが、発生から48時間～14日のphase2および14日以降のphase3では感染症や慢性疾患のコントロールなど保健防疫対策・更正医療が必要とされる。この時期において歯科医師による専門的口腔ケアの介入は避難所肺炎・感染症の予防などに有効な場合が多いと考えられた。

【結論】

国際災害医療においては多職種によるチームアプローチが必要であり、更生期には歯科医療の介入が有効な場合が多い。歯科医療者も日頃から国際災害医療の準

備活動へ積極的に参加・アピールし、国際災害医療における役割を認識することが重要である。

第17回 歯科保健医療国際協力協議会（JAICOH）総会および学術大会 に初めて参加して 神奈川歯科大学南東アジア支援団（KDC-SAS）実行委員長 平田宗善

初めてJAICOHの総会・学術大会に参加させて頂き、感謝しております。これまで私自身、海外ボランティア歯科医療活動を実施している団体については、あまり存じ上げずにおりましたが、この会に参加して多くの方々が、それぞれの目標を立て、素晴らしい活動をなさっている事を知り、驚きと共にとても嬉しく思いました。各団体が様々な国々において、独自の手法を考え、積み上げてきた実績を基に発表する機会を頂き、各団体の活動指針、また優れた特徴や手段を拝聴することが出来、今後の私自身の活動への参考となり、色々な事を学べた学会でした。

KDC-SAS は、スマトラ沖地震による津波被災地の1国であるタイ王国で、私が8年前に始めた、ボランティア活動で知己となった多くの歯科医師、友人からの協力要請で震災40日後に、現場視察をして、まるで写真でしか見たことがなかった原爆の跡のような悲惨な状況に驚愕し、また避難キャンプ地で会った被災者達の沈んだ表情を間の当たりにして以来、歯科医師として口腔衛生の立場から支援出来ることは何か？との問答をきっかけに、神奈川歯科大学の梅本学長、前同窓会会長 故 藤田先生を中心に立ち上げた団体です。



先の学会では、第1回目の活動を報告致しました。そして、つい先日第2回目の活動を終えて帰国したばかりです（上写真）。

震災から2年足らず、約4000名の死者、約2000名の行方不明者、約20000人の被災者を出した、パンガ一県カラク地域は復興途中ではありますが、人々の表情は目に輝きを取り戻し、明るく、精一杯頑張っている姿を見て、逆に私達団員が何かを頂いた活動でした。

今後もKDC-SASでは、タイ王国を中心に活動を継続して行きたいと思っております。JAICOHの皆様の活動同様、思考錯誤を繰り返して、対象地域に笑顔が増える事を願っております。

平田宗善先生プロフィール
神奈川歯科大学南東アジア支援団(KDC-SAS) 実行委員長。神奈川歯科大学卒業、平田歯科医院、日本歯科医師会国際交流委員会委員。1989年KADVOとしてフィリピン・セブ島で海外ボランティア開始。1996年タイの活動を起草して、現在KDC-SASでタイを中心に活動中。

カンボジア国シェムリアップ州小学校における口腔内検診と口腔保健に関するインタビュー調査

特定非営利活動法人 地球の保健室
永井祥子

地球の保健室は口腔保健を中心とした教育を教員に行い、児童への歯科衛生教育のシステム作りを行うことを目的としている。2005年7月カンボジア国シェムリアップ州ポンク郡の小学校における口腔内検診と口腔保健に関するインタビュー調査を実施した。

「プロジェクトの目的」

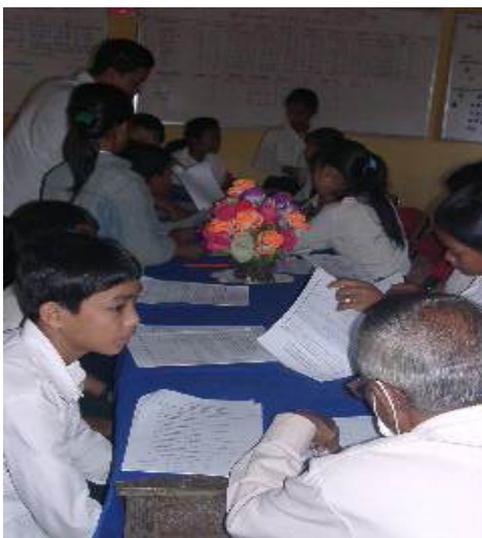
現在の地域全体の口腔衛生状況を把握し、ベースラインデータを作成し、今後の活動の評価に用いる。

「方法」

看護師・小学校教員に対して調査のためのマニュアルを作成して、3日間の口腔衛生教育・口腔内検診トレーニングを行い、6年生児童の口腔内検診とインタビューを行った。



口腔内検診の様子



インタビュー調査の様子

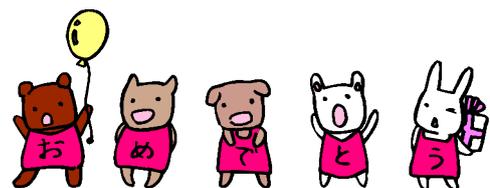
「結果」

- ①都市部では農村部に比べてう蝕が多く、歯肉炎が少ない。
- ②歯に痛みを抱えても薬を服用するだけで治療することは少ない。
- ③歯磨きの回数・歯磨きの道具は都市部の方が良い。
- ④砂糖摂取量は都市部の方が多い。
- ⑤フッ素洗口を行う2校では、4年間でDMFTは減少傾向を示す。
- ⑥カンボジア人看護師はう蝕に関しては過大評価し、歯肉所見は過小評価する傾向にある。
- ⑦井戸水の使用状況は都市部・農村部で大差はない。

「考察」

- 1) 都市部においてはブラッシングの習慣は定着しており歯肉の状態は良いが、砂糖摂取量が多く、う蝕が多い。
- 2) フッ素洗口によって4年間でDMFTは減少傾向にあり、効果を示す。
- 3) 患者を受け入れる環境が不足している。
- 4) カンボジア人看護師の研修の強化が必要。

以上のように得られたベースラインデータから今後は口腔保健を隣接する学校保健プロジェクトに組み込んでいきたい。



途上国における学校歯科保健の評価

○ 深井稜博、中村修一、矢野裕子、平出園子、小原真和、梁瀬智子
(ネパール歯科医療協力会)

【目的】

新しい保健プログラムが途上国に導入される場合に、現地がそれを受け入れ普及していくプロセス評価と、どのような成果が得られたかというアウトカム評価はいずれも重要な評価の手法である。しかしながら、しばしば途上国でみられる急激な都市化など生活環境の変化が、プログラムの効果に影響する場合があります。単純なベースラインと比較だけでは十分なアウトカム評価ができない。本報告では、演者らが1994年から支援しているネパールにおける学校歯科保健プログラムの約10年間の成果について口腔保健行動および口腔内状態から評価を試みた。

【対象および方法】

対象地域はネパール王国首都近郊Lalitopul郡のThecho村、Dhapakhel村、Sunakochi村、Chapagaon村の4村とその周辺地域である。調査対象者は、3歳～16歳829名（男性411名、女性418名）であり、インタビューおよび自記式質問紙調査と口腔検診を実施した。質問紙調査項目は、①口腔保健行動、②口腔保健に関する知識・認識、③口腔保健関連QOLの3項目である。統計的解析は、クロス集計と多重ロジスティック回帰分析（変数減少法ステップワイズ、SPSS13.0J）を用いた。

【結果および考察】

(1) プロセス評価：学校歯科保健への取り組みとして、教師への口腔保健専門家養成は1994年から始まり、その受講者数は、Thecho村9校38名（1994年開始）、Dhapakhel村7校27名（1998年開始）、Sunakochi村6校13名（2001年開始）、Chapagaon村10校13名（2001年開始）である。フッ化物洗口は、Thecho村9校1776名（1994年開始）、Dhapakhel村7校1425名（1999年

開始）、Sunakochi村6校775名（2002年開始）、Chapagaon村10校1613名（2002年開始）を対象に実施されている。歯科保健教育は、口腔保健専門家研修を受講した教師を中心に年1～2回の歯みがき指導と生徒の口腔内チェックが行われてきた。

(2) アウトカム評価：口腔清掃行動をみると、「歯みがき」および「歯磨剤の使用」は、約90%の定着率であった。「甘味摂取」は38.8～53.4%の者が「週2,3回以上」の摂取頻度を示した。口腔保健に関する知識は、歯みがきとフッ化物の効果、う蝕の原因について、73.9～96.0%の定着率であった。11-16歳を対象とした多重ロジスティック回帰分析（ステップワイズ）の結果、う蝕罹患に関連のある要因には、種族、フッ化物洗口期間、紅茶入り砂糖摂取頻度の3項目が選択された。

【結論】

本研究結果から、学校歯科保健プログラムは、プロセスおよびアウトカム評価でいずれも成果が得られた。今後は、甘味摂取に対する地域レベルのアプローチが必要であると考えられた。



発表者の連絡先：

〒341-0003 埼玉県三郷市彦成 3-86

深井歯科医院・深井保健科学研究所 深井稜博

Email: fukaik@ka2.so-net.ne.jp

JICA 草の根技術協力事業（草の根協力支援型）に応募して

トンガ王国における歯科保健の為にプロジェクト

南太平洋医療隊 <http://spmt.jp/> E-Mail:Kawamura@pb3.so-net.ne.jp

○河村サユリ 河村康二

【要約】

南太平洋医療隊は 1998 年よりトンガ王国において 歯科ボランティア活動を行っている。ボランティア活動を行うためには資金の確保は不可欠であり、大きな課題でもある。以前は埼玉県・国際交流協会より 3 年間の資金補助を得ていたが、2004 年度からは自己資金のみで活動をしている。2004 年 1 月に JICA 草の根協力支援型事業提案書を提出したが、採択までの道のりは長く、数々の修正を重ねることとなる。事業提案書を作成するにあたり PCM 法を採用し作成する方法を学んだ。2005 年 2 月に条件付き内定となり JICA からの要検討事項に回答書を作成提出する。2005 年 8 月に提案書を再提出し 9 月に採択内定書を受け取る。11 月に JICA トンガ事務所とトンガ政府健康省との口上書 (MINUTES) を提出したが、その後外務省レベルの同意が必要との事で FIJI の日本大使館とトンガ王国政府との口上書 (MINUTES) が 2006 年 4 月に交わされた。この間半年は、事業提案書に組み込まれた活動であるにも拘らず、更に自己資金を捻出せねばならない状況下での活動を余儀なくされた。

5 月に 1 年間の予算書を作成、提出しここに至った。JICA との事業実施まで様々な経過をたどったが、今後 3 年間は JICA との共同事業の形でボランティア活動を行う計画である。

1998 年より現在まで私達の活動は徐々にではあるが確実に進化し、草の根支援型事業の主流となる学校保健を行う施設、幼稚園・小学校は 30 施設約 4000 名の児童を対象に実施している。また 2005 年、トンガ健康省で歯科・医科スタッフ・学校長などを対象にワークショップを開催、町では「歯の健康フェスティバル」を催し、広く歯科保健を体験、認識してもらう契機となった。反面 2004 年より現在まで自己資金のみで活動を維持していく大変さをも体験した。JICA との事業実施までの事務手続きに費やす時間は膨大で、本業の側に据えるには困難であった。草の根協力支援型事業に応募する JAICOH の会員、他のボランティア団体がもっとスムーズに実施されるようになるような布石になればと考えます。

【謝辞】

南太平洋医療隊の活動にご支援・ご協力をいただいた日本大学松戸歯学部社会口腔保健学講座、日本大学松戸歯学部国際保健部、トンガ国立 VAIOLA 病院、南太平洋医療隊員、JICA 東京 に感謝いたします。

モンゴルで『歯科疾患予防プロジェクト(5 年)』を取り組んで

神戸医療生協 生協なでしこ歯科 (日本モンゴル文化経済交流協会)

○黒田耕平 金寿子

<はじめに>

「モンゴル人の健康はモンゴル人自身の手で守る」ことをコンセプトに、モンゴルの歯科医療と公衆衛生の向上を目的とした交流活動を続けてきた。2000 年から、歯科診療所「エネレル」(1994 年共同開設)を中心に厚生省、メディア等の後援を受け、全国 21 県で「歯科疾患予防プロジェクト」を立ち上げることができた。

<プロジェクトの目的>

エネレル歯科診療所を中心に両国の間で進めてきた国際歯科医療交流を、「予防プロジェクト」として立ち上げることで全国規模の交流として発展させること、さらに①歯科医療と公衆衛生の向上を目指すモンゴル歯科医師のネットワーク作り、②歯科疾患予防の研修(講義・実習・実践)を体験することで全国規模で予防意識を高める、③他職種との協力関係作りを進め、公衆衛生の効果を高める、④モンゴルの中で「エネレル」の発言力を高める等も目的とした。

〈対象および方法〉全国 21 県から招聘した歯科医師各 1 名が、各県で 3 歳児 100 名を選び、各県の行政、教育、メディア等の協力者を作って、歯科検診・アンケートとう蝕予防指導を、5 年間経年的に行うこと。毎年 1 回首都でのプロジェクト会議に経過を持ち寄り、発表、論議するとともに、講義・実習等を受けること。



孤児院にて 21 県歯科医師による
う蝕予防媒体の自作と実演体験

〈結果および考察〉

郡部ほど遊牧生活者が多いモンゴルで同一個体 100 人を 5 年間継続して対象とすることは難しい(5 年間継続児は 64%)。また政治・経済の混乱が続くモンゴルでは、歯科医師自身も移動、開業、廃業等によって最後は 18 県からの参加となった。う蝕予防効果は、3 歳時一人平均う蝕歯数 3.14 本から、7 歳時では 3.47 本と大きな効果があった。さらに両親の予防意識が高くなったこと、教育関係者や保護者会、ラジオ・新聞・行政等とも協力ができた等の報告があった。

黒田先生連絡先：〒651-2109 神戸市西区前開南町 1 丁目 2-25 生協なでしこ歯科
TEL. 078-978-6480 FAX. 078-978-6056 Email: hpdqm355@yahoo.co.jp

日本大学松戸歯学部 国際保健部の活動について

日本大学松戸歯学部 国際保健部
木村 匠

日本大学 松戸歯学部 国際保健部は 2000 年に学生を中心として設立され、設立当時よりさまざまな団体、先生方に支援を受け、学生による国際医療、歯科保健活動に関する活動を行っております。国際保健部は、希望学生をつのり、南太平洋医療隊のトンガプロジェクト参加、歯科医学教育国際支援機構(OISDE)主催スタディーツアー参加、APDSA(アジア太平洋歯科学学生会議)、国際保健に携わっている先生方との勉強会及び講演会、国際医療のシンポジウムへの参加 等を行っております。開発途上国での活動、



モンゴル語版「予防プロジェクト」のまとめ本
(モンゴル語印刷発行)

〈結論〉

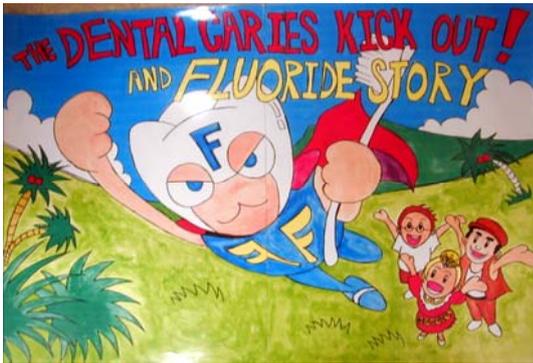
今回の「予防プロジェクト」のねらいと成果は、以下の通りである。①モンゴル人自身が公衆衛生・歯科保健予防を実践できる基礎作り。②モンゴル歯科医師の意識改革(治療だけでなく予防の責務、地域保健での役割)。③プロジェクトを通して全国規模での歯科医療と公衆衛生の向上(点から面へ)。④歯科医師のネットワークづくり→独自のプロジェクト立案・遂行へ。⑤他職種との連携・ネットワークづくり→歯科医師の発言力向上→保健予防の提言。⑥「エネレル」に対する理解と信頼確保→主導的役割でリーダーシップ→日本からエネレルを通じて全国へ発信。⑦エネレル職員の役割自覚と責任感→自信とやりがい→職員の定着。⑧予防プロジェクトのまとめ本がモンゴル語で発行できたこと。

国際医療の講演、勉強会を通し、学生の視点であらゆる面に疑問を持ち、行動し、見て、聞いて限られた力の中で自分たちには何ができるのかを考え、学生同士のモチベーション向上を図ります。



学生が作った媒体(紙芝居)を用いての歯科衛生活動。小学校にて。

自分自身、南太平洋医療隊のトンガプロジェクトに関心を持ち、3度参加させてもらいました。現地の学校でのフッ素洗口および歯ブラシ指導、病院見学、歯科健診の手伝いを通して、国際保健とはどのようなものか、どのようにあるべきかを体験しながら学ぶことが出来ました。参加した当初は、まだ大学に入ったばかりということもあり、



フッ化物洗口を題材にした紙芝居の表紙

歯科学生の相互理解を深めるための交流を目的としたバングラデシュスタディツアーの報告

北海道大学 Interactive Dental Students' Alliance for Health care (IDAH、冒険歯科部)
中澤誠多朗

7月2日のJAICOHの学術大会にて、2005年末から2006年始にかけて行われた我々のバングラデシュスタディーツアーについて報告する機会をいただけたことを光栄に思います。

今回のバングラデシュスタディーツアーは、財団法人ユネスコアジア文化センター (ACCU) の「2005年 ACCU・ユネスコ青年交流信託事業 大学生交流プログラム」による資金援助を得て、北海道大学歯学部 of the 学生を中心としたメンバーにより 15 日間の日程で行われました。活動は現地の大学・病院の見学および日本の歯科教育と学生生活についてのプレゼンテーションを通じた、日本とバングラデシュの学生の相互理解を目的としたものと、Comilla 市近郊の Parchanga 村における歯科・内科の無料巡回診療での見学・補助とが主な内容となっております。国立のダッカ大学歯学部では、我々の実習内容のプレゼンについて、ダッカ大学の学生からアメリカの例と比較した鋭い質疑がなされ、その後の食事会で

知識不足で何もすることがないのではないかと思います。手作りの紙芝居を通して、子ども達にむし歯の怖さ、口腔清掃の意義を教えることができました。また、逆にこちらが学ぶこともたくさんあり、とても有意義な時間を過ごすことができました。

以前は国際保健という言葉が自分の中であいまいで、具体的にどのようなものなのか分からない部分もありました。単に海外に赴き、一方的に技術や知識を教えるだけのものと考えていましたが、国際保健とは相手国、地域との相互関係で成り立つもので、またその国が自ら問題に対して考え自立していくことが大切なのだ実感しました。実際に行ってみると、その国の風習、生活習慣、文化の影響でなかなか達成が困難であること、慎重にコミュニケーションを図らなければ一方的な知識、技術の押し付けになってしまうことを身をもって体験することができました。

も「本当に授業は英語ではなく日本語で行うのか」「彼女はいるか」など幅広い範囲のやりとりが見られ、相互理解はかなり進んだものと思われます。私立のサッポロ歯科大学では、同大学が北海道大学に留学なさっていた先生方が中心となって設立されたこともあり、格別友好的に迎えていただきました。学生による日本の歌のプレゼントは大変印象的で、また我々が披露した「桃太郎」の英語劇も大変好評でした。



ダッカ大学歯学部にて

Parchanga 村での無料巡回診療はダッカ大学のアーメッド教授らが自分たちで費用を負担して月2回行っているものですが、会場として使用した村の小学校には何百人もの人が集まっていました。小学校の窓際に長椅子を置き、自然光のもとで次から次へと抜歯していく様子はさながら野戦病院を思わせるものがあり、また我々がお手伝いした歯科健診の記録ではDMF 歯数でFが一本も見られないなど、歯科医師が絶対的に不足（1億人以上の人口に対し歯科

医師が約3千人）している上に歯科医師の約9割が首都ダッカに偏在しているというバングラデシュの歯科医療の実態を目の当たりにしました。

帰国後 JAICOH の学術大会での発表のお話をいただき、私自身は初めて参加いたしました。皆様の発表を拝見し、またいろいろとお話させていただいたことで我々のスタディツアーの方向性、あるいは「国際貢献」というものへのスタンスについて改めて考えるための大変よい刺激になったと思います。その後（2006年7月）に行われたスリランカスタディツアーも、その経験が多少なりとも活かされたものになったと自負しております。また何らかの機会に皆様にご報告できればと考えております。

ラオス・タイスタディツアー2006 報告

東京歯科大学国際医療研究会

○白井亮、望月里依奈、山崎加恵、大平貴士、小川奈美、眞木吉信

東京歯科大学国際医療研究会では毎年学生主催の海外スタディツアーを実施しており、今回が第6次である。今回は2006年3月29日から2006年4月4日までラオスのヴィエンチャンおよびタイのチェンマイにおいて実施した。

2日目(3月30日)は、ラオス大学歯学部および付属病院でセンプーワン歯学部長からお話をうかがった。ラオス大学歯学部は1996年に設立され、本年度が10周年である。学生は各学年30-40名であるが今年度の新生は国の方針により74名であった。それに対し、教員は常勤が30名・非常勤が30名と日本の歯学部にとり比べても少ない。付属病院はとも状態が悪く30年以上前のチェコ製のチェアを使用しておりほとんどが故障している。

科大学に留学経験があり日本語の会話もできる Dr. ソンポンからお話をうかがった。歯科はチェアが3台あり3名の歯科医師により一般的な歯科治療を行っている。次に、ラオス大学付属マホソット病院では歯科部長の Dr. カムホンからお話をうかがった。歯科は7台のチェアがあり12名の歯科医師により運営されている。マホソット病院は歯学部付属病院と同じような設備であった。Dr. カムホンは学校保健にも力を入れており17の学校を担当し約4万人を検診している。



ラオス大学歯学部にてメンバーと Dr.カムホン、
タイから来ていた Dr.プラディーブ

ラオス大学付属セタティラート病院では東京医科歯



チェンマイ大学歯学部にてメンバーと
地域歯科学講座スタッフ

翌日(3月31日)、JICAのスペシャリストの曾根さんの案内でヴィエンチャン県のマリア・テレサ病院の病棟と IMCI 研修を視察した。さらに、「Kidsmile Project」で寄生虫対策のプロジェクトを実施しているノンサワーン小学校を県職員のカンバイさん

とボウヒョウ校長の案内で視察した。週3回、教員の指導のもと全児童がいっせいに歯磨きを行っている。また、ほとんどの家庭が歯磨き粉を購入する経済力があり、タイから輸入された歯磨き粉を使用している。しかし全児童の70%に虫歯が存在する。アンチェリー・Dr. アリラートにタイの歯科事情につ

国際歯科保健の講義を通して、歯科学学生はどのように反応するか

ネパール歯科医療協力会
中村修一

途上国において歯科の国際貢献を進めるには1. ODA レベルでの歯科保健医療開発援助、2. NGO による国際貢献、3. 国と歯科大学と NGO の連携による展開がある。実際に国際貢献を進めるには資源の活用を適切に図らねばならない。資源とは「人」、「物」、「金」、「情報」をさすが、そのうち「人」が最も大切な資源であると言える。途上国で歯科貢献をおこなえる人材を育成する必要がある。演者は将来の歯科界を担う歯科学学生へ「国際歯科保健医療学」の講義を行い、講義終了後感想文の提出をもとめ国際貢献に関する関心度を分析した。

講義は2005年10月に某大学歯学部3年生を対象に1回実施した。また、同じ内容の講義を2005年7月に別の大学2年生に行い、感想文を回収した。

講義内容は1) 途上国と先進国、国際援助の状況、2) 国際保健の現状とネパール状況、3) ネパールでの活動の概要、4) 17年間の活動評価、5) 国際協力の問題点と対応、6) 参加隊員の感想、7) まとめである。

講義に関する歯科学学生の感想をピックアップすると、自分の常識を越える講義で感銘した、医療の原点に触れ感動した、自分もエネルギーでありたいと感じた、熱い気持ちになった、この気持ちを持続したいなど感動したとの感想が多かった。講義を聞いて変わったとの感想には、非常に為になった。今までの歯科に関する考え方が変わった、まず行動することが大切と思った、歯科医師を目指す自分の考え方が少し変わったなどと思う、心を開くことの大切さを感じたなどがあつた。また、歯学部を志した動機を強く喚起した、日々惰性的な学生生活を見直し目標を持って行きたいと考えた、自分の将来が見

いて一般的なことをうかがった。また、地域歯科学講座主任の Dr. ソンウッドが数年前まで勤務していた ICOH を視察した。ICOH はタイ・ラオス・ビルマ・カンボジア・スリランカなど東南アジアの歯科保健医療のヘルスワーカーの研修施設として活動している。

えてきた、将来に希望を見いだした、相手の立場を考慮した歯科医師になりたい、自分も目標を見いだせるような歯科医師を目指したい、何も考えずに生きて行けるが、一つでも熱く語ることが出来るような歯科医師になりたい、など歯科界で将来に対し希望と目標を見いだしたのと感想があつた。また、歯科医療の在り方について社会との関わりをとらえた、歯科医師となって自分の利益だけを求めて生きることが出来るが、社会的責任を担って生きて行ける可能性がある、人材育成が地域の社会構造を変えることがあることに感動した、などの感性あふれる感想もあつた。

医療の在り方として、情報化の時代だが知識だけに頼らず、理想の医療を実践できる歯科医師になりたい、医療は人と人とのコミュニケーションが大切であると感じた、知識や論理だけではなく、経験に基づいた歯科医師になりたいと捕らえ歯学部に入り将来の選択肢は大学に残るか臨床医として開業するしかないと狭く考えていた。しかし、国際協力など自分で開拓できる可能性があることを強く感じたとの感想もあり、高校時代まで国際協力に興味があつたが、歯学部に入學し歯科で国際協力は無理と思つていた。講義を聴いて希望が湧いた、国際協力に対する考え方が大きく変えられた、勉強に励み将来国際的に活躍出来る歯科医師を目指したいと歯科の国際貢献について主体的に捉える志の高い感想が多かつた。

まとめ: 1) 歯科学学生の国際貢献に関する感受性は高い。2) 国際貢献について小中学生時代から興味はあるが、歯科と国際貢献が結びつきが少ない。3) 歯学部での国際保健の講義が必要である。

編集後記

富士山が雪化粧を纏いました。思わず小田急線の中、携帯カメラでパチリ。私の勤める茅ヶ崎(神奈川県)の海は夏の喧騒が嘘のように引いた今がのんびりできて静かで穏やかで私的にはベストシーズン到来! という感じです。マイブームは登山。勤務医院にワングル部を設立! 来週は紅葉狩りに大山に行ってきます。次は丹沢、来年は八ヶ岳、いつかはヒマラヤトレッキング...夢は広がります。でもやっぱり、今はお休み中だけどネパールには国際協力でいきたいな...。(梁瀬)